

うつほ物語の教材価値

中井賢一

On the Worth of the *Utsuho-Monogatari* as a Teaching Material

Kenichi NAKAI

要旨

うつほ物語は、安定教材と言われる他作品と共通の文学史的特徴を有する現存最古の長篇物語である。また、苛烈な環境に打ち克ち、真摯な学習姿勢を継続することで未来を切り拓く仲忠の生き方は、日々自らのありかたに思い悩む高校生的心を強く揺さぶるだろう。物語文学史上の特徴の観点からも、また作品内容の特徴の観点からも、うつほ物語は高校古文の教材として適切であり、指導者は積極的に授業に用いるべきである。

一 問題の所在

周知の通り、『うつほ物語』は『源氏物語』に先行する現存最古の長篇物語である。秘琴伝授に関わる伝奇物語的性格や、あて宮求婚譚に関わる恋物語的性格、また藤壺腹皇子と梨壺腹皇子との立太子争いに関わる政治物語的性格など、様々な特徴を併せ持ち、さらには、物語発端のセオリー「昔、…」との冒頭部を複数巻有する、長篇化の過程が窺えるその組成のありかたにおいても注目されるべき重要作品である。

しかし、高等学校古文の現行検定教科書において、この物語を採録するものは皆無だ。指導者としても、せいぜい古典文学史の授業でその作品名に触れる程度、といったところが偽らざる高校現場の現状なのではないだろうか。

確かに、高校古文の授業で扱う「長篇物語」としては、日本文学の精華『源氏物語』の地位が揺らぐことは今後ともないだろう。また、「伝奇物語」や「恋物語」のカテゴリーに通常分類される『竹取物語』や『伊勢物語』など

も、比較的読解が平易である上に、多く学習者に予備的知識があり、高校古文の導入段階には極めて有用であって、これも今後とも採録は続くであろうと思われる。それらの観点からは、敢えて『うつほ物語』を採録しなければならぬ必然性は乏しく、ゆえに教材としても注目されにくいことなのだろう。そのような現状は十分に理解される。

しかし、如上の観点とはまた別の、高校生向け教材としての相応しさが、この『うつほ物語』にはあるのではないか。「秘琴伝授」と関わって、発展途上にある高校生にこそ読ませたい重要な内容が、『うつほ物語』には含まれているのである。

二〇一二年十二月二十一日（受理）

宇部工業高等専門学校一般科准教授

二 教材例

以下、前節で述べた「重要な内容を有している」本文を引用するが、教材として使用する便宜のため、ABC三つの場面に区切り、また私に現代語訳を付しておく。なお、引用の『うつほ物語』本文及び頁数は、小学館『新編日本古典文学全集うつほ物語』に拠る。この『新全集』本の底本は、尊経閣文庫蔵前田家本である。

【場面A】

俊蔭女は、時の太政大臣の子、若小君と一夜の邂逅の結果、仲忠を生む。父俊蔭の死後、零落した俊蔭女と仲忠は、都を離れ、熊から譲られた北山のうつほで木の実を食べながら生活していたが、ある日、俊蔭女は、父から授けられた秘琴の奏法を仲忠に伝授しようとする。

「今は暇あめるを、おのが親（俊蔭）の、かしこきことに思ひて教へたまひし琴、習はしきこえむ。弾きみたまへ」と（俊蔭女は）いひて、①りうかく風をばこの子（仲忠）の琴にし、ほそををばわれ弾きて習はずに、聴くかしこく弾くこと限りなし。人気もせず、獣、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたきわざをするに、②たまたま聞きつくる獣、ただこのあたりに集まりて、あはれびの心をなして、草木もなびく中に、尾一つ越えて、いかめしき牝猿、子ども多く引き連れて聞く。

（俊蔭巻八〇〜八一頁）

〈現代語訳〉

「今は暇があるようなので、私の父俊蔭が、重要なことだと思つて私に教えなされた琴を、あなたに習得させ申し上げましょう。弾いてみなされ」と、俊蔭女は言つて、りうかく風をこの子仲忠の琴にし、ほそお風を自分が弾いて習わせると、仲忠は利発で立派に弾くことこの上ない。他に人気もなく、獣も熊や狼でないものも来ない山で、このようにすばらしい演奏をしていると、たまたま聞きつけた獣は、ただただこの周辺に集まって、憐憫の心をもよおして、草木もなびくところ、尾根を一つ越えて、大きな牝猿が、子どもを多く引き連れて琴を聴く。

【場面B】

俊蔭女による仲忠への秘琴伝授は日々続き、仲忠は成長していく。かくしつこの琴を弾くを聞くほどに、この子七つになりぬ。③かの祖

父が弾きし七人の師の手、さながら弾き取りはてつれば、夜昼と弾き合はせて、春はおもしろき草々の花、夏は清く涼しき陰に眺めて、花、紅葉の下に心をすましつ、わが世は限り、命あらむに從はむ、と思ふ。④琴は残る手なく習ひ取りつ。この子変化の者なれば、子の手母にもまさり、母は父の手にもまさりて、ものの次々は劣りこそすれ、この族は伝はるごとにもまさること限りなし。かくて、この子十二になりぬ。容貌のうるはしくうつくしげなること、さらにこの世の者に似ず。綾、錦を着て、玉の台にかしづかるる国王の女御、后、天女、天人よりも、⑤かかる草木の根を食物にして、岩木の皮を着物にし、獣を友として、木のうつほを住みかとして生ひ出でたれど、目もあやなる光添ひてなむありける。

（俊蔭巻八一〜八二頁）

〈現代語訳〉

このようにしながらこの琴を弾くのを聴くうちに、この子仲忠は七歳になった。あの祖父俊蔭が弾いた七人の師の奏法を、そのまま全て弾き覚えてしまったので、母子は夜昼と合奏して、春は美しい草々の花を見、夏は清々しく涼しい木陰で物思いをし、桜や紅葉のもので心を澄ませつつ、母俊蔭女は、我が生涯は命の限り運命に従おう、と思う。仲忠は琴の奏法を残りに習い取った。この子は変化の者であるから、子の琴の奏法は母にも勝り、母のそれは父にも勝つて、一般に習い事は代々劣りこそするが、この一族は伝わる毎に勝っていくこと限りなし。こうして、この子は十二歳になった。容貌が美しくかわいらしいことは、全くこの世の者とも思われぬ。綾や錦の着物を着て、立派な御殿で大切にされる帝の女御や后、天女や天人よりも、このように草木の根を食料にして、木の皮を着物にし、獣を友として、木のうつほを住居として成長したけれど、仲忠には目にもまぶしい光が備わっていた。

【場面C】

ある時、東国の武士の襲来があり、俊蔭女と仲忠も危険にさらされるが、秘琴の不思議な力によって難を逃れる。その後、帝の北山行幸があった。

その日、帝、北山に行幸したまふ日にて、その山のあたりなど御覧するに、⑥その日さぶらひたまふ右大将のおとど（昔の若小君。仲忠の父）、御馬を引きまはして、この琴の調べを聞きつけたまひて、御兄の右のおとどに聞こえたまふ、「この北山に、限りなく響きのぼるものの音なむ聞こゆ。琴の声と聞こゆれど、多くのものの音合はせたる声にて、⑦内裏にさぶらふせた風の一族なるべし。いざたまへ。近くて聞かむ」とのたまふ。

（俊蔭巻八四〜八五頁）

（現代語訳）

その日は、帝が、北山に行幸なさる日で、その仲忠らのいる山の付近などを御覧になつておると、その日お供なさる右大将殿が、御馬を乗り回して、この琴の音を聞きつけなさつて、兄の右大臣殿に申し上げなさるには、「この北山に、この上なく響き渡るものの音が聞こえます。琴の音と思われませんが、多くの楽器の音を合わせたような音で、宮中にごさいますせた風と同じ類の琴であるようです。さあいらつしやつて下さい。近くに行つて聞きましょう」とおっしゃる。

三 うつつほ物語の教材価値

【場面A】においては、特に次の叙述に注目したい。まず、傍線部①「りうかく風をばこの子（仲忠）の琴にし、ほそををばわれ弾きて習はずに、聴くかしく弾くこと限りなし」とある部分だ。「ほそを」風も「りゆうかく風」も秘琴の名称である。母俊蔭女が『ほそを』風で手本を見せ、子仲忠が「りゆうかく風」で習い取るのであるが、その体得ぶりは「聴くかしく弾くこと限りなし」と評しうるほど見事なものだったという。また、その音色は、傍線部②「たまたま聞きつくる獣」や「草木」、「いかめしき牝猿」やその「子ども」までも感応させたという。

並外れた秘琴の力を召喚しうる人物として仲忠があること、そして、その「力」が母から秘琴の奏法を通して仲忠に継承されたことが知られる。いわば、仲忠は、母の奏法を日々学ぶことで、「力」の「体得」者として成長したのである。仲忠の真摯な学習姿勢が、継承者に相応しい「力」を「体得」させたと言えるだろう。

【場面B】においては、次の叙述に注目したい。まず、傍線部③「かの祖父が弾きし七人の師の手、さながら弾き取りはてつれば」とあるところだ。「かの祖父」とは、秘琴を伝授された初代、俊蔭その人であり、「七人の師の手」とは、俊蔭が直接習い取った「師」仙人の奏法のことであるが、仲忠はそれらを「さながら」、即ち「師」の奏法そのままにマスターしたという。さらに、傍線部④「琴は残る手なく習ひ取りつ。この子変化の者なれば、子の手母にもまさり」とあるとおり、「残る手なく」完全に習得した上に、その技量は「母にもまさり」るほどであったという。「変化の者」に映るほど仲忠の習熟ぶりは卓越しており、文字通り、出藍の誉れとも言うべき成果であったと言えるだろう。しかも、傍線部⑤「かかる草木の根を食物にして、岩木の皮を着物にし、獣を友として、木のうつつほを住みかとして生ひ出でたれ

ど」に明らかのように、「草木の根を食物にし、岩木の皮を着物にしなればならぬくらいに、仲忠の生育環境は苛酷なものであった。このような苛烈な環境に打ち克ち、この上ない「成果」を挙げる仲忠のありかたは、決して看過してはならないだろう。

さて、その後、東国の武士の蛮行から秘琴の「力」によって救われた仲忠と母俊蔭女に大きな転機が訪れる。【場面C】である。注目すべきは、傍線部⑥⑦だ。「右大将のおとど」というのは、かつて俊蔭女と邂逅した「若小君」、即ち仲忠の実父である。「右大将」は、俊蔭から宮中に伝えられた秘琴「せた風」の音色と、仲忠らが奏でる「この琴の調べ」、即ち「りゆうかく風」や「ほそを」風のそれとの酷似を聞き判じ、より近くで聞こうとその主を訪ねて北山のうつつほにやつてきて、遂に父子の対面が実現する、という次第である。

周知の通り、この父子の対面を契機に、仲忠は母俊蔭女ともども都に迎えられる、そして順調に出世を果たしていくのであった。いわば、【場面C】は、零落した母子が、一転、復権の途に就く大きな転換点なのであるが、そこに「この琴の調べ」の「力」が契機として働いていることは疑いない。

無論、「秘琴伝授に関わる伝奇物語」として、秘琴の「力」が仲忠を権力の座に押し上げるという展開が仕組まれるのは、この物語の組成に照らして至極当然のことなのではあろう。また、むしろ「右大将」が、「右のおとど」右大臣を「兄」に持ち、かつ帝の行幸に近く随伴できるほどの権力者であり、その上、宮中の「せた風」と仲忠らの音色の類似性を峻別できる能力をも兼ね備えた識者であるという人物造型のありかたについて、より重視する視角もあろう。

しかし、ここではそれらは一旦措こう。【場面A】～【場面C】の物語展開には、極めて教材として有用な要素が盛り込まれていると思うのだ。それは、即ち、「苛烈な環境」に打ち克ち、「真摯な学習姿勢」の継続によって師を凌駕するほどの「成果」を挙げ、それを元に「復権」の未来を切り拓く、という仲忠の生き方である。教授者を上回るほど一途に自身の才能を磨き、その成果を以てより良い未来を開拓していく仲忠の姿は、過度とも思われる情報社会の中で自らの進路や役割に思い悩み、また日々の人間関係に汲々としているであろう昨今の高校生を強く揺さぶるに相違ない。自身のありかたと仲忠のそれを重ね合わせ、自身の今、そして未来について腰を据えて思索する、そのような機会をこの『うつつほ物語』の一節は十分に提供するのであり、それゆえ教材としての意義も大いにあると思うのだ。

前々節に『うつつほ物語』が検定教科書に採録されにくい現状について触れた。『源氏物語』『竹取物語』『伊勢物語』といった、いわゆる安定教材は、

今後も変わらず高く評価され続けるだろうし、そのこと自体に異議を唱えるつもりは毛頭ない。しかし、それら作品の有する文学史的特徴——「長篇物語」、「伝奇物語的 성격」、「恋物語的 성격」、「政治物語的 성격」など——が、全て『うつほ物語』にも備わっていることは忘れてはならない。そして、仲忠の生き方という、高校生にとって恰好の思索材料が含まれていることは忘れてはならない。それら全てを兼ね備えた、「現存最古の」、物語作品、それが

『うつほ物語』なのだ。
仲忠の生き方という物語内容の点からも、また、物語文学史上の特徴の点からも、『うつほ物語』は、もつと教材として取り上げられるべき作品だと思ふのであるが、本稿では、微細な一例を提示するに留まった。稿を改めることにする。